

論文

殷代の貝貨と縄文時代のタカラガイ加工品

Shell Money of the Yin Dynasty and Processed Cowry of the Jomon Period

安木 新一郎
YASUKI Shinichiro

抄録

タカラガイは縄文時代後期（3,000～4,000年前）の北海道の貝塚から見つかっている。また『竹取物語』には燕の子安貝が登場する。日本では古代よりタカラガイは安産のお守りとされ、近代においても観光地のお土産になるなど、タカラガイの利用が続いている。一方、中国の殷代後期（3,100年前）ではタカラガイ、その中でも貝（キイロダカラ）が墓への副葬品とされたり、貨幣として用いられたりした。貝は君主や王族が臣下の功績を表すための手段とされたことから、貝は価値尺度機能を持ち、その後、貝貨として商取引に借用されたのだと思われる。殷王朝が滅ぶと徐々に貝の文化は失われていった。

キーワード：タカラガイ、貨幣、貝貨、縄文時代、殷

問題意識

タカラガイ *Cypraeidae* を貨幣、財宝、あるいは装飾品とする文化は、古くから世界各地で見られる[上田 2016][Yang2019]¹。特に日本では縄文時代後期（4,000 年前）以降の遺跡からタカラガイが見つかり、『竹取物語』には燕の子安貝が登場し、古代より各地でタカラガイは安産のお守りとされ、近代においても観光地のお土産になるなど、タカラガイの利用が続いている。

一方、縄文時代後期に当たる時期に、中国では黄河中下流域（河南、河北、山東）を中心に夏、殷²、西周といった王朝が栄え、殷代からタカラガイ、その中でもキイロダカラ *Cypraea moneta* が墓への副葬品とされたり[佐原 2001]、貨幣として用いられたりした。漢字は殷代にできたが、貝という字はキイロダカラの象形である。しかしながら、中国では徐々に貝の文化は失われていった。

白川静は多数の著書の中で[白川 1970][白川 1971]、殷と古代日本の文化および制度の共通性について触れている。また、日中ともにタカラガイに関する労作は多いものの、両者を比較したものはあまりないように思われる。

本稿では、殷代の中国の貝（キイロダカラ）と縄文時代の日本のタカラガイ利用との間の共通性と差異について考える。

1. タカラガイの構造

世界最古の金属貨幣は紀元前 7 世紀にリディア（トルコ西部）で作られたエレクトロン（金銀自然合金）貨とされるが、中国では紀元前 11 世紀にはキイロダカラが貨幣として用いられていた。

タカラガイは亜熱帯および熱帯の海に生息する、卵形の殻を持つ巻貝の一種である。タカラガイの特徴は外套膜が貝殻を取り巻いており、貝殻は金属光沢様でかつ種類によってさまざまな模様を持つ。

外見からはそう見えないが、輪切りにするとその貝殻が他の貝類と同じく対数らせん（等角らせん）構造になっていることがわかる。巻貝でも二枚貝でも、その貝殻は自己相似の対数らせん構造になっているが、タカラガイは黄金らせん³に近似している⁴。人間は黄金らせんの物を美しいと思うようにできているのか

もしれない。

タカラガイは古来より世界各地で財宝あるいは貨幣として用いられてきた。深海産の希少なタカラガイの殻は宝石のように高額で取り引きされ、タイドプールに生息するキイロダカラやハナビラダカラ *C. annulus* などは貨幣、ビーズ、利尿剤などとして用いられてきた⁵。ちなみに、英語で現金を意味する cash は Hindui 一語でタカラガイを表す caixi を語源とする。

タカラガイの背面は陶磁器のような特有の金属光沢様を持つ。腹面は中央の溝が左右を非対称に分かつ形で殻口を作り、左側を内唇、右側を外唇と呼び、両方とも鋸歯状の刻みを持っているが、外唇の方が刻みが深い。

2. 殷商の貝貨

よく知られているように、経済に関する漢字には貝が使われることが多い。例えば、買、販、貨、貧、賄、賂などがあり、売も旧字は貝を含んでいる。貝はキイロダカラというタカラガイの象形である。漢字ができたと言われているのが殷代で、その 22 代目の王である高宗武丁の妻・婦好の墓からは、キイロダカラ 6,800 個余りとヤクシマダカラ *C. arabica* 1 個が出土している。貝は生死と関係づけられていた。

殷末から西周初にかけての金文には貝を賜るという記事が見られるが、単位は朋、すなわち 10 個ずつで、孔を開けひもを通して 10 個ずつにしていた。殷王朝では貝は王族に与えられ、また西方から興った周が殷を滅ぼした後も、周王朝は殷系や東方諸族に貝を賜与していた[白川 1971]。

その後、キイロダカラが中原に入つてこなくなると、石製、骨製、淡水貝製、そして青銅製⁶などさまざまな材質の貝貨が作られ、戦国時代になつても楚では青銅製の貝貨と見なされる蟻鼻錢が流通した[Thierry 2017]。ただし、楚の蟻鼻錢は、貝を知らない楚人が古代周王朝の制度を真似て作ったものだと考えられており[江村 2010][江村 2011]、湖北・湖南を含む長江流域には元来貝を用いる文化はなかった。

殷末から西周期の金文にあらわれる貝貨については、これを一般的な交換手段とみなす説と、限られた意味での支払手段機能を持つにすぎないという説に分かれ

ている。貝は一般的交換手段機能を持ち、殷代にはすでに市場経済があったとするのは中国の学者が、支払手段ではないとするのは日本の学者が多いようである[宮澤 2007]。

以下に白川[1971]にある殷末の金文に見られる貝に関する記録の書き下し文とその訳を挙げる。

①小臣愉犧尊

丁巳、王、夔（き）の祖を省す。王、小臣愉に夔の貝を賜う。これ王來りて人方を征す。これ王の十祀又五、彫（ゆう）する日なり。

丁巳に王は夔の祖という、その地を支配する神をまつた。王は小臣愉に夔の貝を賜った。これは王が来て人方を征した時のことである。これは王の 15 年の彫という儀式の日である。

②小子ホウ（峯の下に酉）卣

乙巳、子、小子ホウに命じて、先んじて人を燠（かん）に以（ひき）いしむ。子、ホウに貝二朋を光賞す。子曰く、貝はこれ汝の暦（いさおし）を蔑（あら）わす、と。ホウ、用て母辛の彝を作る。十月二に在り。これ子、曰いて人方マイ（目の下に毎）を望ましめたまう。

乙巳に王子は小子ホウに命じて、斥候として人を伴って燠という所に赴かせた。王子はホウに貝 2 朋を名譽ある賞品として与えた。王子は、貝はおまえの勲功を表していると言った。ホウはその光栄を記念し母辛の彝という青銅器を作った。12 月のことだった。これは王子が軍を率いて東方の異民族・人方マイに対し遠方から呪った時のことである。

③小臣邑囂

癸巳、王、小臣邑に貝十朋を賜う。用て母癸の尊彝を作る。これ王の六祀、彫する日なり、四月に在り。

癸巳に王は小臣邑に貝 10 朋を賜った。その光栄を記念して母癸の尊彝を作った。これは王の 6 年、彌の日で、4 月のことだった。

殷末の金文を見ると、祭祀儀礼や戦功に対して貝が朋単位で与えられており、また賜与する側および対象の格（小子は王族、小臣は臣籍降下した王族）、祭祀儀礼、戦功の程度によって与えられる貝の数が異なっているのであり、貝が価値尺度機能を果たしていることが分かる。

これが西周期には損害賠償の額が貝の数で表される[宮澤 2007]等、価値尺度として使用される範囲が広がり、商取引や貸借にも用いられるようになったと考えられる。

すなわち、まず貝は呪術的なもの、財宝と見なされ、その後賜与という君主と臣下のあいだという特殊な関係における価値尺度機能を持つようになり、徐々に他の取引にも用いられるようになっていったのである。

貝貨は商取引から発生したのではなく、商取引がすでに価値尺度機能を持っていた貝を借用したのだと言えるだろう。

3. 縄文人とタカラガイ

殷から西周期の黄河中下流域と同じくタカラガイを財宝と見なしていたのは、同時代の縄文時代の日本列島に住んでいた人々、縄文人である。縄文土器は、北は樺太・千島・北海道から南は九州・沖縄まで分布している。北海道では礼文島や函館市の縄文時代後期（3,000～4,000 年前）の遺跡からタカラガイが出土している[忍澤 2018]。

縄文時代のタカラガイ加工品には、a) 背面を取り除いたもの、b) 裸口部を内唇部と外唇部に分けるという形で a を二分したもの、c) 背面に小さな孔をあけたものという 3 種類がある[忍澤 2018:4-5]。

殷人と縄文人の共通性として、タカラガイの背面の金属光沢様にはほとんど関心がなく、背面は削るか大きな孔を開け、腹面の裸口部のギザを重要視した点が挙げられる。腹面の一部に小さな孔を開けて原形をとどめようとする c 型の例は、

縄文時代の日本では長野県栃原岩陰遺跡などわずかである[忍澤 2018:6]。

また、千葉県市原市西広貝塚五七号住居跡の土器から、幼児骨とともに、殻長 18.2mm のキイロダカラの外唇部が見つかっている[忍澤 2018:7-8]。殷商の婦好墓と同じく、キイロダカラは呪術的意味合いを持ち、葬送儀礼の一端に関わるものだったと考えられる。

もちろん殷人と縄文人には違いもあり、殷人がほぼキイロダカラのみ用いるのに対して、縄文人はキイロダカラだけでなく、より大きなホシダカラ *C. tigris*、ハチジョウダカラ *C. mauritiana* (子安貝)、ヤクシマダカラ、ホシキヌタ *C. vitellus*などを好んで使っている。東日本の貝塚ではホシキヌタが多く見つかっており、その北限が礼文島の縄文後期の浜中 2 遺跡で、殻長 4.7mm のホシキヌタの加工品がある[忍澤 2018:6]。また、富山市北代遺跡からはホシキヌタ大のタカラガイ型土製品が出土するなど、北海道・東北・長野・北陸のおもに内陸部でホシキヌタが代用品であっても好まれていたことがわかる。

殷人は貝を背を削りひもを通して 10 個ずつまとめて使っていたのに対し、縄文人は 1 つの貝を 2 つにきれいに割って使っていた。b 型、殻口部を内唇部と外唇部に分けるという形で a を二分したもの例として、すでに述べた西広貝塚五七号住居跡の貝が挙げられる。b 型の大半はギザ（鋸歯部）のよりはつきりした外唇部の方であり、なぜ外唇部が好まれたのか、どのような用途があったのか分かっていない。ただ、北海道函館市戸井貝塚資料にアスファルトの付いた外唇部が見つかっていることから、アスファルトという接着剤で何かにアクセサリーとしてくっつけていた可能性もある[忍澤 2018:7]。岩手県蛸の浦貝塚の資料に、b 型に小さな孔が開いているものもあるが、きわめて例外的だとされる[忍澤 2018:7]。

殷から西周期の貝の産地は南シナ海と考えられており、一方、東日本の貝塚で見つかるホシキヌタは房総半島や三浦半島といったより北の海域に棲んでいる。ハチジョウダカラなどのホシキヌタよりも大きなタカラガイの産地は八丈島や三宅島といったより南の島嶼であり、ホシキヌタの方が比較的手に入れやすかったのであろう[忍澤 2018:6]。殷人と同様に縄文人も、特に北海道の人々は、自身の居住地からはるか南にある産地からタカラガイを得ていたことには違いない⁷。

まとめにかえて ～キイロダカラが好まれた理由

縄文人が比較的大型のタカラガイを好んだのは、その数ではなく、もの自体が重要だったからであろう。また、外唇と内唇に分けて使うためには、キイロダカラのように小さいと加工がより難しいということも考えられる。

これに対して殷人がキイロダカラに執着したのは、その小さいことが関係していると思われる。キイロダカラ、すなわち貝は、誰が何を理由に与えたのかという物語が付加されているとはいえ、価値尺度機能を持っており、個数が重要となってくる。貝ひとつひとつの殻長や重さは違っていたとしても、計数貨幣としての貝はすべて等価値だと見なされる。そうであれば、たくさんの貝を保有したり輸送したりする上で、貝はなるべく小さい方が便利である。したがって、より南に生息するより小さなタカラガイであるキイロダカラが貝貨としてもっとも適当であると考えられる。

13～14世紀のモンゴル帝国領雲南において流通したキイロダカラの産地はインド洋のモルディブやフィリピン南部のスールー諸島といった赤道に近いサンゴ礁の島々で採れたものだった[安木 2012]。ベンガルやアフリカなどで使われた貝貨もモルディブ産であり、赤道に近い場所で採れたキイロダカラが他の地域に比べ小さかったことが、モルディブ産キイロダカラが世界各地で貨幣とされた理由の一つであろう[Hogendorn and Johnson 1986:9-11]。

中国では徐々に貝の文化はなくなったが、日本では平安時代の『竹取物語』に燕の子安貝が登場し[木下 2018:16]、朝廷への調にタカラガイがあり[木下 2018:19]、子安貝、安産のお守りという形でタカラガイの使用はつづいた。中国では貝は貨幣であり、銅錢が貝を代替したため貝が必要でなくなった。これに対して日本では貝は貨幣ではなかったので、貝の代わりとなるものではなく、呪術的なものと見なす慣習が残ったのである。

なお、沖縄でも縄文時代併行期の遺跡からキイロダカラ、ハナビラダカラ、ホシキヌタなど埋納品が出土しており[島袋 2018]、本土と相似的である。14世紀には琉球王国は明朝にキイロダカラを供給するという外部の需要に対応してキイロダカラ採取を行っていた[高良 1993:84]。

一方、台湾ではツオウ族のような山地に住む人々がキイロダカラを装飾品とし

て使って來たが[前田 2007:291]、貝貨にはタカラガイ以外の貝類が用いられていた[宮本 1935]。

タカラガイを財宝とする文化は、各地で独自に発生したものなのか、あるいは相互に交流があったのかは不明である。今後の研究課題としたい。

付記

本稿は函館西高校でおこなった令和元年（2019年）度出張講義「知っておきたい貨幣の歴史」の内容に加筆・修正したものである。

参考文献

伊藤崇展[2017]「書評 オラムバヤリン・エルデネバト[2009]『中世モンゴル地域にキリスト教の一派が伝播した略史について』ウランバートル」『東方キリスト教世界研究』、1。

上田信[2016]『貨幣の条件：タカラガイの文明史』、筑摩選書。

上村文隆[2007]『生き物たちのエレガントな数学』、技術評論社。

江村治樹[2010]「中国における古代青銅貨幣の生成と展開（6）：楚貝貨の性格」『名古屋大学文学部研究論集』、（史学 59）。

江村治樹[2011]『春秋戦国時代青銅貨幣の生成と展開』、汲古書院。

忍澤成視[2018]「縄文時代のタカラガイ加工品：その特異な扱いについて」『民具マンスリー』、51（6・7）。

落合淳思[2015]『殷：中国史最古の王朝』、中公新書 2303。

柿沼陽平[2007]「文字よりみた中国古代における“貨幣”的展開」『史滴』、29。

木下尚子[2018]「子安貝の誕生」『民具マンスリー』、51（6・7）。

佐原康夫[2001]「貝貨小考」『奈良女子大学研究年報』、45。

佐原康夫[2002]「中国古代の貨幣経済論と貨幣史認識をめぐって」、中国史学会編[2002]『中国の歴史世界：統合のシステムと多元的発展、第1回中国史学国際会議研究報告集』、東京都立大学出版会。

島袋春美[2018]「奄美・沖縄・先島諸島のタカラガイ利用」『民具マンスリー』、51（6・7）。

白川静[1970]『漢字：生い立ちとその背景』、岩波新書 C95。

- 白川静[1971]『金文の世界：殷周社会史』、東洋文庫184。
- ボイテルスパッヒャー、A.・ペトリ、B.（柳井浩訳）[2007]『黄金分割：自然と数理と芸術と』、共立出版。
- 前田良一[2007]『縄文人はなるかなる旅路』、日経ビジネス文庫、日本経済新聞社。
- 松島義章[2010]『貝が語る縄文海進：南関東、+2°Cの世界（増補版）』、有隣新書。
- 宮澤知之[2007]『中国銅錢の世界：錢貨から経済史へ』、佛教大学鷹陵文化叢書16、思文閣出版。
- 宮本延人[1935]「臺灣蕃族の貝貨の一種に就て」『民族學研究』、1（1）。
- 安木新一郎[2012]「13世紀後半モンゴル帝国領雲南における貨幣システム」『国際研究論叢』、25(2)。
- 安木新一郎[2021]『国境なき貨幣：ジョチ朝・キプチャク=ハン国の歴史』、群像社（近刊予定）。
- 柳亮[2012]『黄金分割：西欧の比例、ピラミッドからモダン・アートまで（新装版）』、美術出版社。
- Hogendorn, J. and Johnson, M.[1986] *The shell money of the slave trade*, Cambridge University Press.
- Thierry, F.[2017] Les caractéristiques de la monnaie chinoise des origines aux Qing, Monetary and Its Circulation in Western Eurasia in the Pre-Modern Times pt.II. Medieval Coinage in Eastern Eurasia Proccedins. Annual Report of the Grants-in-Aid for Scientific Research A No.16H01953.（ティエリー、フランソワ（訳・中島圭一）[2017]「中国貨幣の特質：その始まりから清代まで」、『前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開、東ユーラシアにおける中世貨幣：予稿集』、科研費 16H01953）。
- Yang, B.[2019] *Cowrie Shells and Cowrie Money: A Global History*, Routledge, London and NY.
- Спасский, И. Г.[1970] *Русская монетная система*, (<http://www.arcamax.ru/books/spassky01/spassky23.htm>)（最終閲覧日：2019年4月5日）.
- TACC, 25 июня, 2019г. (<https://nauka.tass.ru/nauka/6589759>)（最終閲覧日：2020年12月22日）

¹ ロシアでは16世紀頃までキイロダカラを貝貨として使っていたが、ロシア語圏以外でロシアにおける貝貨流通に触れたものはほとんどない。モンゴル帝国支配下のロシアにおける貝貨流通については安木[2021]（近刊予定）を参照。

² 商とも呼ばれるが、落合[2015]にしたがい殷と書く。

³ 黄金らせんについてはボイテルスパッヒャー・ペトリ[2007]および柳[2012]を参照。

⁴ タカラガイの殻の中心から水平な直線を引き、殻との接線との間の角度を実際に計ってみると104～110度程度となっており、黄金らせん（約107.03239度）に近い。他の貝であればサザエ *Turbo sazae* は100度、アワビ *Haliotis* は120度、ハマグリ *Meretrix lusoria* は140度ほどである[上村2007]。

⁵ ラオスでは現在でもキイロダカラを碎いて利尿剤としている（櫻木晋一・朝日大学教授のご教示による）。

⁶ なお、キイロダカラだけでなく、タカラガイ型青銅製品も、ロシア・トウバ共和国の匈奴の墳墓からも発見されているが（TACC, 25 июня, 2019г.）、詳しい内容については、今後の課題としたい。

⁷ 日本列島周辺の海域の水温に関しては、縄文時代は現代よりも高く、いわゆる「縄文海進」が見られたが[松島2010]、後期は寒冷化していたとされ、礼文島や函館で見つかったタカラガイの採取地としては房総半島が北限であろう。